

や ま が ら

研究分野をこえたコミュニケーションを行うためには、概念の措定と共有が重要である。どんなに豊富な説明や厳密な定義を与えても、分野によってそこから受ける印象が違ってくる。だからといって最初から説明のための努力を放棄するのは感心しないし、万人に受け入れられる「わかりやすい」説明が良いともかぎらない。筆者が理想だと感じるコミュニケーションとしては、それぞれの分野の拠って立つ歴史、分野を形成してきた歴史を踏まえた橋渡しが肝要で、このとき共通理解の助けとなるのは、学術用語として確立する以前のその語を、語義史 etymology に即して遡る作業ではないかと思っている。

以前ある語の意味をポケット版の多国語辞書から考えてみたことがあった。言語の専門家からみれば所詮お遊びの域を出ないだろうが、さまざまなツールの発達により、その気になれば素人でも到達できる情報の深度は、当時とは比較にならないほど広がっている。

一例を挙げよう。現行の仏国森林法典にアフアージュ affouage という語がある。以前、旅行中に会ったパリの法学部学生にこの語を聞いても知らなかったのが、フランス人の一般教養には属さない語らしい。日本語の「林野入会」と似た語であることは察しがついてしたが、歴史家 M. ブロックも述べているように林野利用の態様は実にさまざまである。

そこで、「フランス古語の語義が知りたい」と SNS に書いていたら、仏語の碩学が、DicFro という著作権フリーの古い辞書のポータルサイトを教えてくださった。語義・語源の探求にとっては昔の辞書にこそ価値がある。サイトから有名な百科事典を選んでアフアージュの標準的な語義をみると、「コミューンの住民がコミューン有林で木材 bois を採取（する権利）」とある。森林法の解説書にも記されている説明だが、語源や「木材」の指すものが判然

としない。そこで、上記サイトの辞書を片っ端から当たるうちに、ラキュルヌ Lacurne とゴドフロア Godefroy という菌ごたえのある二つの辞書に出会った。その他の辞書に比べ、解説が重厚なのである。ラキュルヌ曰く、「ラテン語の前置詞 *ad*（＝のために）と名詞 *focus*（＝火）からなる」アフアージュの語は、「ショファージュ、つまり人が1年間に自分の火のために消費する薪などの量を意味」し、「炉にくべるための薪をアフアージュないしショファージュと称した」などとある。火が語源なので燃料！ 目からうろこである。

この『ラキュルヌ』は、18世紀に La Curne de Sainte-Palaye という人が編んだもので、56,000 語を擁しその注解は浩瀚で洞察に満ちている。19世紀にこれを発見した別の人が8年がかりで出版し、『ゴドフロア』の補完資料として中世語の研究に不可欠に

なっている…といったソルボンヌの教授の評価がある。実際、アフアージュの解説の典拠には、いわゆる普通慣習法からの引用やラテン語文献への言及があった。こんな労作が読めるとは驚きだ。

上記サイトに加えて、マイ PC に入れて愛用している電子版英英辞典も、語源で検索することができる。アフアージュの語源 *focus* と共通の語源をもつ英語を探すと、*fuel* があった。まさに「燃」材である。仏語でも *focus* から派生している別の語 *foyer* には「家計」と「かまど」の二義がある。今でこそ一戸の家には一つのかまどがあるが、昔は、領主が所有しバンと称する使用料を徴収して農民に使用させる共同窯 *four banal* があったので一対一ではなかったようだ。語源や語義には、ちょっと調べただけでも、こんな沼がある。

この底知れぬ沼、有用無用をいう以前に、面白く気づきに満ちている。素通りしたり敬遠したりするにはあまりにもったいない沼である。

(aka-gera)

語義散策の愉しみ